

日本民家園だより

vol.65

特集

日本民家園40周年記念
(2)

企画展示「むかしむかしかわさきで」－民家園のはじまり・重文伊藤家住宅－
2007年7月1日(土)～11月25日(日)

『日本民家園収蔵品目録8 旧伊藤家住宅』刊行
古江 亮仁『日本民家園物語』再版

むかしむかしかわさきで

1. はじめに

伊藤家住宅は、川崎市麻生区金程にありました。関口欣也博士の調査がきっかけでこの家が300年ほど前のものとわかり、1964年には国の重要文化財になりました。大切に守らなければならない日本の宝として、正式にみとめられたのです。その後、この家を川崎で保存しようという声が起こり、これがきっかけとなって日本民家園が生まれました。

ここでは、伊藤家がどのような暮らしをしていたか、ご主人酉造さんの話をもとに紹介していきましょう。伊藤家の暮らしを知ることで、むかしむかし川崎で人びとがどんな生活をしていたのか、そのことが少しずつ見えてくるはずですよ。

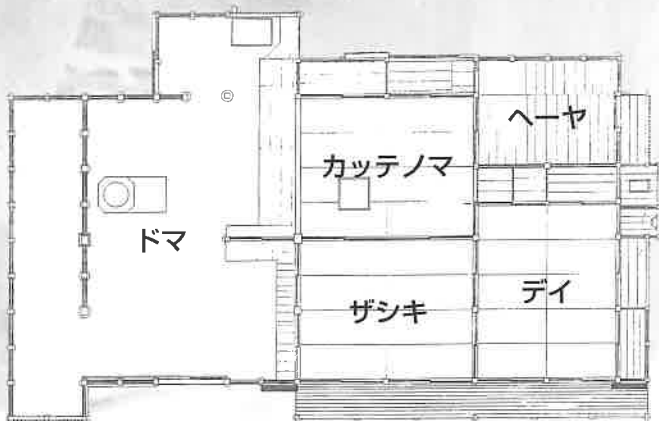
2. 伊藤家の暮らし

(1) いまの家とむかしの家

いまの家とむかしの家、一番のちがいは何でしょうか。もちろん形や中のようにも変わりました。ですが、もっと大きく変わったことがあります。

たとえばいま、結婚式を家でやる人はいなくなりました。赤ちゃんを家で産む人もほとんどいなくなりました。病気が重くなれば病院に入ります。年をとって動けなくなると、老人ホームに入ることも多くなりました。ですから、家で亡くなる人はめずらしくなり、お葬式をやることも少なくなりました。しかし、いまは専門の場所でやるこうしたことを、むかしはすべて家でやっていたのです。

酉造さんご夫妻は結婚式を家でやりました。花よめさんが家に着くと、三々九度を行います。3つのさかすきで3回ずつ、合わせて9回お酒をくみかわし、夫婦の約束をかためるのです。このときお酒をそそぐのは、5、6才ぐらいの男の子と女の子の役目でした。



移築前の間取り

それが終わると披露宴です。仕切りの戸をはずして2つのへやをつなげ、おおぜいの人を招いておいわいをしました。この日は花よめさんを見るため、となり村の人まで集まり、しょうじに穴をあけてのぞきこんだそうです。

ご夫妻のお子さんも家で生まれました。むかしの人はおなかに赤ちゃんがいても生まれる直前まではたらくきます。そしていよいよとなると、産むのを助けてくれるお産婆を呼んで赤ちゃんを産むのです。生まれるのはほとんど夜中で、酉造さんはそのたびに、となりの町田市までお産婆をむかえにいったそうです。

生まれて21日になると、おばあさんが赤ちゃんをだいて井戸に行きました。井戸の神さまに赤ちゃんの顔を見せるのです。

いまの家とむかしの家で、形が一番ちがうところは屋根でしょう。伊藤家の屋根はカヤでできていました。カヤというのは長いスキのことです。山で刈り取ってくるのですが、一度にたくさん集めることはできません。そこで、毎年少しずつ刈りためて、物置などにしまっていました。近所で屋根の修理があると、ナワを持っておたがいに手つだいにいったそうです。

(2) 家の中

では、家の中を見ていきましょう。

むかしの家の多くは、大きく2つの部分に分かれていました。ゆかのあるところと、ないところですよ。

ゆかのないところをドマといいます。土をかためただけのへやです。伊藤家では冬のあいだ、この場所でナワやアシナカを作っていました。ナワは屋根の修理などにたくさん必要でした。アシナカというのは、畑仕事などにはくみかいぞうりで、これも1年分を作りました。いずれも材料はお米をとったあとのワラで、これを石の上でたたき、やわらかくして使いました。このほか、伊藤家ではモチつきもドマでやりました。モチを食べたのは正月だけではありません。「ミズモチ」といって大きなタルに水を入れてモチをつけこみ、ときどき取り出して食べていました。このほかにも、庭のお茶の葉でお茶作りをしたり、ショウユやミソづくりをしたり、さまざまな仕事に使われていたのです。

ドマの奥には、食事のしたくをするためのカマドとナガシがありました。ガスはありませんから、火を使うときには木の枝や落ち葉をもやします。水道もありませんから、竹を利用して山のわき水を引き、これをためて使います。伊藤家には井戸もありましたが、こ

ちらはせんたくなどに使い、食事やおフロにはわき水を使っていました。ナガシに置かれた大きなカメには、この水が一日中流れていたそうです。

ゆかの上にあがると、伊藤家には4つのへやがありました。それぞれちがった名前と呼ばれ、使い方もちがいます。たとえば「へーヤ」というへやがあります。ここは酉造さんのご両親がねるときに使っていましたが、結婚式で三々九度をあげるのはこのへやでした。酉造さんたちが使っていたのが「デイ」です。赤ちゃんが生まれるときにはこのへやが使われました。「ザシキ」は酉造さんの姉妹が使っていましたが、養蚕でおもに使われたのがこのへやでした。

3. 伊藤家のしごと

(1) 養蚕

伊藤家は養蚕をやっていました。カイコというイモムシを育て、マユをとっていたのです。

カイコはたまごから育てます。タネガミというたまごがたくさん産みつけられた紙を買い、これを木箱に入れて生まれてくるのを待つのです。

生まれたイモムシは家の中で育てます。小さいうちはとても弱いので、風が入らないようへやのすきまに紙をはったり、へやをあたためたりします。伊藤家ではおもにザシキを使いましたが、さかんな時期はほかのへやにもひろげ、人のねる場所もないほどになります。さらに、カイコが大きくなると屋根うらのほか、庭にテントをはってその下でも飼っていました。

カイコのえさはクワの葉です。伊藤家には広いクワ畑があり、3月、この畑に肥料をやるのが仕事のはじまりでした。クワの葉は、カイコが小さいうちはやわらかいところだけきざんであたえます。大きくなると枝ごとあたえます。この葉を運ぶのが毎日の仕事で、そのほか食べカスやフンのそうじもしなければなりません。集めたフンやカスもむだにはせず、畑の肥料にしていました。

カイコは4回脱皮してマユを作ります。できあがると、このマユを熱で乾燥させます。こうしておかないと中からガが出てきてしまい、マユがだめになってしまうのです。マユを売りに行くときは大八車を使いました。酉造さんはこどものころから、車のうしろを押して手つだったそうです。

カイコのマユからとった糸を絹といいます。絹の着物は高級品で、カイコを飼っていてもふだん着ることはありません。家で使うのは「クズ」と呼ばれるできそこないのマユだけで、これをうすくのばして着物の中に入れたりしました。

(2) 農業

伊藤家をふくめ、金程では田んぼにわき水を利用していました。そのため水はけが悪く、「ドブツタ」と呼ばれる深い田んぼもありました。腰までもぐるくらいどろが深く、しかも足をぬかなくても横に動けるほどゆるかったそうです。そこで、この地域では暗渠排水を行いました。暗渠排水とは、田んぼの下にパイプを埋め、これによって余分な水をすてることです。この水ぬきのパイプには、フシをぬいた竹を使いました。伊藤家にはこのフシぬきのための道具がいまものこっています。こうした暗渠排水を金程全体で3回、伊藤家ではさらに数回行いました。これによってようやくドブツタがなくなり、農作業に機械が使えるようになったのです。

伊藤家には、田んぼより畑の方がたくさんありました。おもに作っていたのは、サツマイモとムギです。

毎年4月になると、つみかさねた落ち葉の中に、前の年のサツマイモを埋め込みます。落ち葉が発酵して熱を出すため、この中に入れると芽が出るのです。5月の末ごろ、このイモを取り出し、芽が出た部分を切り取って土に植えかえます。そしてここで1カ月ほど育て、今度はこのナエをムギのあいだに植えていくのです。植え終わると、つづいてムギの刈り入れでした。サツマイモの収穫は11月です。これが終わると、今度はここにムギを植えました。つまり、同じ畑を使って、2つの作物を入れかわりに育てていたのです。

なお、伊藤家ではくだものも育てていました。ちからを入れるようになったのは戦争のあとですが、カキは古くから育てていました。育てていたのは、「禅寺丸」という川崎特産のカキです。伊藤家ではこのカキを新宿まで売りに行っていました。

4. おわりに

伊藤家のある金程は、もとは1つの村でした。江戸時代に書かれた『新編武蔵風土記稿』という本には金程村のページがあり、家の数は13軒とされるされています。この数はその後もほとんど変わらず、戦争中に避難してきた家が少しふえたくらいでした。

金程が大きく変わったのは、昭和30年代からはじまった再開発がきっかけです。山がくずされ、道が広くなり、農村は住宅地へと変わっていきました。

いま伊藤家の庭に立つと、まわりには家が建ちならび、すぐそばに金程小学校も見えます。そこはむかし、酉造さんがたがやした畑や、酉造さんが落ち葉をひろった山があった場所なのです。(渋谷卓男)



伊藤家の屋敷 (昭和 34 年・写真 / 関口欣也氏)



屋敷内の配置